

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第十八回

雷龍王の教え - 危機感の力

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 十八回 雷龍王の教え・危機感の力

世界銀行は被融資国の国家リスクを扱う。だから、国の返済能力を左右する政策と政治が絡み合う改革の泥沼が、仕事場だった。

改革が進む国には、必ず、民の多くが自分の問題として共有する危機感があった。が、災害や戦争でもない限り、自然発生する性格のものではなかった。自分が抱く危機感を国民と共有しようと、大変な努力を重ねる人々がいたからだ。そういうリーダー達から世銀の改革に役立つことを学ばせてもらった。皆、私の恩師である。

恩師数人の筆頭は「雷龍の国」ブータンの前国王、ジグミ・シンゲ・ワンチュク雷龍王四世。国民総幸福量という公共政策哲学の発案者としても知られるが、王は、即位後初の外紙インタビューの際ふと思いついて、「国民総生産量より国民総幸福量の方が大切だ」と語呂合わせをしたら定着しただけだと笑う。いつの世も不幸な民が国家を不安定にするのだから、幸福を中心に国を治めるのは常識だとも笑う。彎曲迂回を改革の学習として、その常識を在位34年間貫いた信念が、王の笑いに響く。

王の動機も危機感。国家持続への危機感だった。ブータンの人口は67万人。平面地図での面積は3万8千平方キロ。熊本市民が九州全土に住むと思えばいい。その小さな国が、北に中国、東西と南にインド国境を睨む。「人の世に不変なものの変化のみ」と言い切る王にとって、世界一、二の人口を誇る大国に挟まれる危機感は、国交の良し悪しや今現在の世界平和などに左右されない。四方を大洋に囲まれ、1億3千万人の同胞に恵まれる日本人には想像もつかない切迫感がある。王の尽力のおかげで今ではブータン人の口癖になった言葉を借りれば、「虎と象に挟まれた蚊」の危機感だ。

小さな国が生き延びるための戦略は「雷龍王の足跡がない村はない」と言い伝えられる即位直後の行幸の結果だった。海拔200メートル前後のインド国境を覆う熱帯ジャングルから、7千メートル級のヒマラヤ巨峰が連なる中国国

境まで、直線距離では僅か200キロを無数の激流が貫き、国土は波打つ急階段の連続。車道に頼れる安易な旅ではない。酸素の薄い大気に喘ぎ、雨期には蛭に血を吸われ、蚊や蚤虱に悩みながら、野宿を強いて歩き続けた。

一人でも多く民の心を聴こうと訪れる王の謙虚な姿に打たれ、民は胸を開いて語った。そうして国家安泰の根源を見つめる時、王が行き着くところはいつも同じ、国民一人ひとりの幸せだった。国民総幸福量は国家安全保障戦略。武力抜きで真剣勝負だと決心した。

幸せは物のみでは得られないから「経済成長は目的にあらず、幸福追求への重要な手段」と位置づける。本気だから政策と行政組織自体の改革が密着し、形より組織文化を重んじ、組織を成す人の意識改革が焦点になる。幸せは全体論で、その要因は各省庁の都合や縄張りなどに従わないからと、国民の視点に沿う横割り行政を重視し、チーム精神に本腰を入れる。

王の危機感に自分の傲慢を知った。貧困解消の使命感に欠く世銀の危機を頭だけで知ったつもりだったと。危機をハートで掴むには王の行幸を手本にする以外、術が無い。だから、家族扱いの貧村ホームステイ体験を部下と共有し、改革の原点にしようと決めた。

世界各国の憲法は、ブータン同様、国民の幸福を高々と謳う。日本の憲法も「生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」と謳う。が、それを国政の軸とする国は、今も昔も他にない。そのブータンの経済成長率は持続して高い。国王主導の政治改革で民主制を迎えた今日も、幸せへの改革が続く。

雷龍王の危機感を母国日本の新政府にもと、祈る。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇九年九月九日付けの電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。